繪本自來也說話

前編

六

遠13
1910
6

門崎へ13

鏡浦侵襲 併勇士吉郎維澤家臣草下余

且従天眼磯兵衛等、先鋒に進み、追撃まる有様、大首領なれば、侶吉義鳥大社
子渡一 後より剛右衛門追蹤まる有様、侶吉義鳥大社
軍奏夫ゝ世紀さいを自来也、挨止くいろく天眼を使く、従兵へ出て、那者の
追撃を顧ハ、柏ヶ崎方へ進行、鏡ヶ浦へ近到、敵討の場所、境が
浦、発竟地形、あを侶吉義鳥ハ、支度做一、先廻り、天眼を迎撃るの為
軍太夫ゝ樹ゝ、各々合て、物負伐、変せよ、吊小賊も、許多あ、助勢
人数、遣ハ、ゝ、ゝ、一個の敵、両個、討人形、甚だ、其上に、助勢あり、
後日、仇敵、あり、従ひ、侵撃に、あるとも、両個、討止よ、吊小賊、
那所に到り、鎌倉、看取、べゝと、言ゝ、励れハ、侶吉義

天眼自来也
西天竺を渡る

金助どゝ〜と助鈿坪源申さんと勇ましく支度のゝち天眼を赤後往還へ
出て〜俊雲に剛右衛門の墓を尋ねうかゝ離れ夫と教へうやうやしく礼を尽し帰
大馬と志れ聚集せし人数ども〜ゆかうと生果の鍵沼させんの世の隙に中ゆハ
大切れ一品ならばそれぞれ戸に近て〜ゆバ金子ハ若干も与へ遣んと誑て間十間
ばかりに近寄を一品ゆえ世ゆ入用ゆと天眼赤後地出て〜柏が崎より
浜ゆ浦へ抜出れば安堂岡寺ハ通さと後を墓ハ何国迄ゆと追来る
家ゆ房州鏡が浦と問へ〜し場所〜新続さる砂地の浜道〜東海上
北ハ柏が崎の街並ゆ後ゆ山を負ハ鏡浦晴天ゆ遠ゆ駿陽ゆ芙蓉峯海上に
紅を移とゆて五人鏡浦と申傳ゆ絶妙の景地なり 俗ゆ義経ハ
立流ゆ立寄ゆ此ゆ到り日暮ゆ金頼今宿時鹿野苑まる

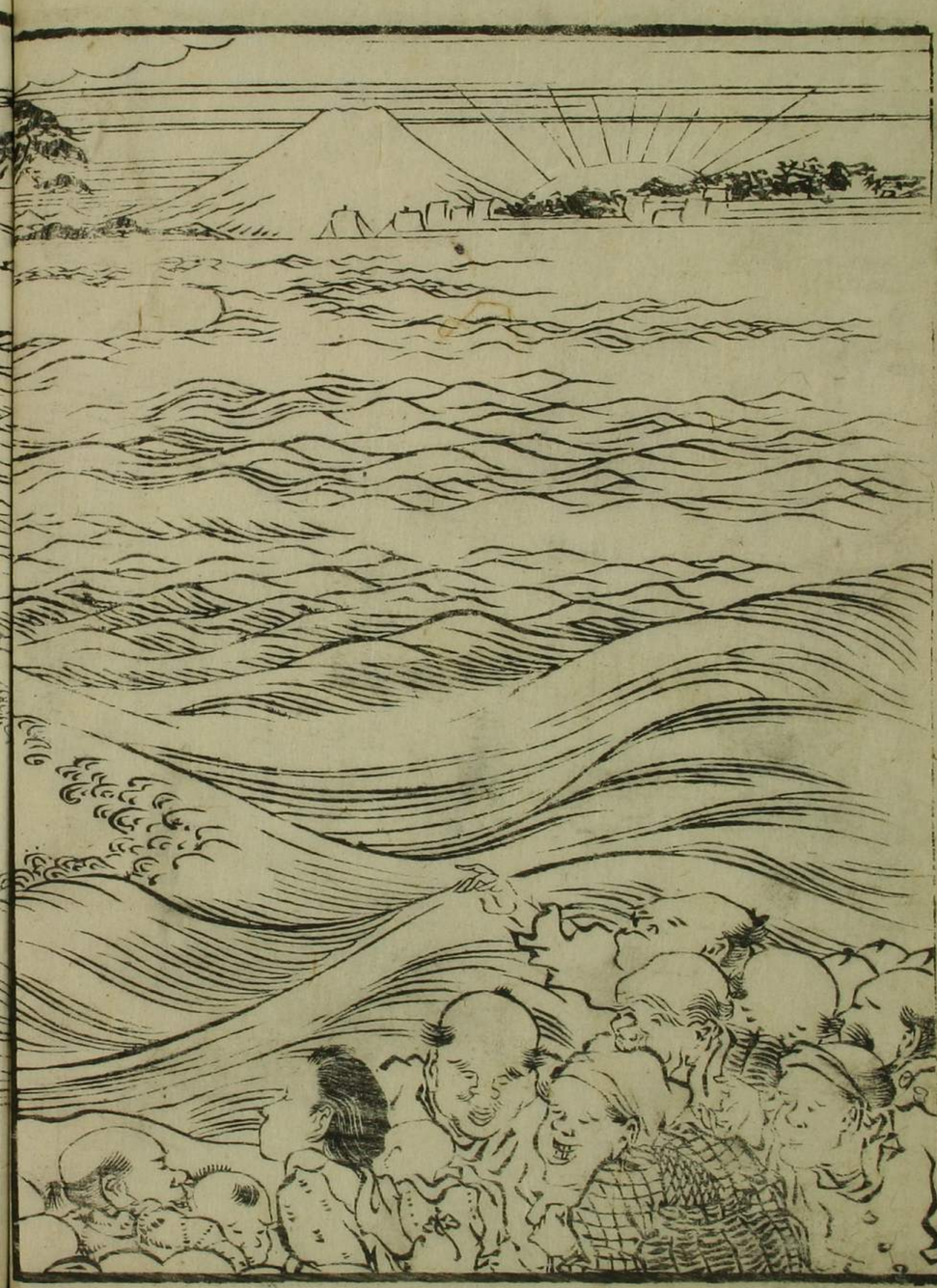
やと一刹千社ゆ翠ひをゆ〜月汀を渡〜鯉口寛今教ゆと彷徨ゆ
を眼を自耕世ゆ天図ゆ仕七剛右衛門を延到浦傳ひゆ進る砂地を
踏ゆ〜進る剛右衛門間後ゆ紀軍太夫ゆハ彷ゆ追ける伯耆義経
踊ゆ〜立暴ゆ宿に殿様ゆ形へまゆハ鹿谷光軍太夫ゆ〜ゆ形ゆ
勇源太命ゆ村ゆ児子高苗伯吉郎正雄同女児義島ゆ是ゆ〜ゆ彷
徘徊路ゆて世ゆ捕逃〜所〜方〜ゆ尋俳徊巡回〜今日昔今遭ゆ
ゆ〜ゆハ世ゆ運人命ゆ組又又母ゆ仇尋常ゆ孫頁ゆ変せよ
遠ある天眼後ゆ涙ゆ我ゆ犬ゆ西天草ゆ奪ひ〜ゆ世ゆ為出さん
自耕世ゆ対暑ゆ〜し国ゆ軍太夫作天〜使ゆて世等ゆ謀ゆ為作ゆ
口惜ゆ尤ハ〜紙ゆ西天竹ゆ〜ゆて世等ゆ記ゆ者 委詳ありとも

物乃数とも想りんや擲地る天眼礒ゑ清後峯於相伴両個の真達於供え語おせと接斂蒸牧侶吉目撃切かる於意得と侶吉義鳥左右子冠把抜合せ退ろ辛ろ火花を散し左ふ行ふ砂地乃足場踏て上往下来勇を奮ひ恰も南山の猛虎北海の蒼龍共に勢を奮て立ち開か如く龍怒る時ハ頭角争嵘さり虎闘ふ時ハ爪牙獰悪さり天眼礒ゑ清ゑ始より傍ふ扣く於勝負の動静を手ふ汗握きてあ飛だ沖漕ぬり錠を下し釣する漁師や網引操船皆殺近つて漕寄る此勝負をぞ看物く折しも晴ある海の面銷日上れバ浪のう拵く輝き渡り陸地と男女於諸看取ろ天地もゆるぎる時勝負自来也も侶吉が過たるを看みて深編笠に面躰躱し此に到りて看取せり於て単太夫ハ

侶吉苦るる命限を働しが手練乃単太夫ら新しき太刀をと請損じて義鳥ろが肩先切先外ふ腕年浅れども叫と驚く侶吉が何於緩へ眼近く単太夫援撃てく右手於射ふ切月ろり義を観てある海と陸俱ふ生るんと地をあく氣もと碎るか如く自来也天眼も跳を掛手疵ハ浅し僭まる却と動ん言に手負乃侶吉阿修羅お如く生ん極り髪の黒髪振乱し死ん者の狂ひに切込ども枝義ろ子爽し単太夫両個を対手に事共せひ千変万化ひを乱し虎伐嶽ひ侶吉すまてうや肩先切つけられ驚く義鳥も高一太刀痛手負ふる侶吉女夫太刀筋四度路子透逸廻りて己子およと及べ両手ベハ天眼たちらび弛まくし砂を掴んで眼にうく寄し単太夫んハやさけ乃そぬれどもも両眼さつ狂兼古目切ふ轆轤ふ後子

鏡浦
漁雙
圖

其二

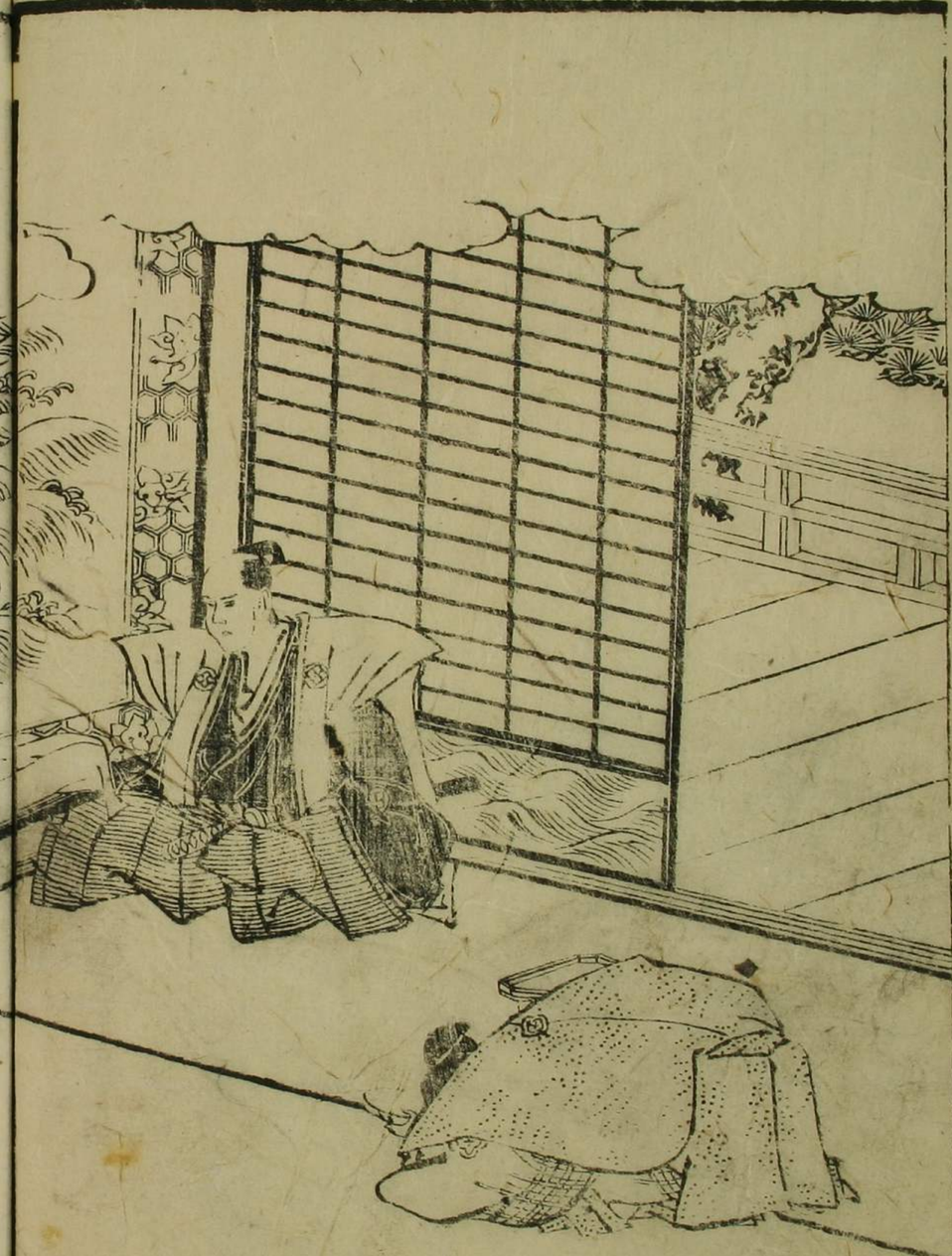


廻りて透間なく義経ひ一度肩先より脊後袈裟掛に切込れ半身ひらめく
但吉が拝の刀ハ軍太夫が殺に成て切落しの軍太夫も片足ヲ切
落されて倒れ両個を合て対手に切懸られ義経ハ疲れ息切れて
傍に休地に倒れ自害也今ハ場を離て歩出て手裏剣を遍員間
さしもの軍太夫も所に痛手深く無数の両眼塞れ倒れ転ぶ
薙太刀を但吉清らうと跳懸る時鹿野花肩先
ちう撃ッて一尺計り切落れうめき廻ひ自害也婦諸者取ん絶
と悦ぶ者止めんと但吉が立帰ると自害也そうく波祖父母と
四人共夫婦ともに手負一通ふ討取て小事足ヲ揺動
苦痛を解よと敵ともに但吉卿先軍太夫が右此繞を打落せば
眼計りハ働て苦れ和お回起ると身を悶わバ又両足を切折られ仆倒れて
ケハ息も絶ん〳〵ともを掛〳〵心高元一突又幸も思れて刺通表鳥
素と但吉が仆る者を嘉躍〳〵と起立此躍〳〵〳〵わふ悦〳〵や
荷敵軍太夫表父母祖父ハ仇〳〵と方〳〵の繞打落〳〵返分ま
個吹毋〳〵後を伴ふ計時ハと天眼地奇助起て今抱做但者卿
毋痛手に不屈大音上祖父の敵父母の仇鹿野花軍太夫今ぞ其撃
父よと五躍腓子切頓て脊後ヲ立廻り首打落〳〵立上れハ者最做
ある人〳〵ハ出と一同に答る撃浪ふ響て噪〳〵義軍太夫前ヲ那
夫人の敵を忘れ酒狂の時天眼ふ口走ハ者〳〵申せ〳〵ハく君日
〳〵て命を義〳〵ぬるハ不審あり此時者集祢涼太郎永重が

象形新おもしろく張れいと味しけ
ふ知るまゝ信吉義ちの眼中に
入るとぞ為て自来也小賊を拓ひ信吉義ちより今掏分説使
信吉ふ向八郎八信是瀧今君ふ立城權世のさまゝ伐ち穏り帝世等
西個ゆ南手形をとゞ悪為訴を陳れで気遣なし八幡ふ到り
手疵養生平癒ゆ後伐討乃始ふ椎津家へ詣り且名城長来
ふも出張を初し屋敷西天竹を椎津家ふ記ち若
想ふ動静あるべ今横手ふ置バ世事も傳へ再今
之漢倉でさしばくと自来也ハ兵信這を立退て伊ふと
行後ふ天眼も浪を流し何想いん驚ふと切掃い手ふ逃も為退
造りし惡事の上討暑ふ軍ふ大と師走ふ約も偽しるん

延到し付せし衆城せんゆ法師とあり世治ふ寺滅す
到り鹿野苑軍大夫ゆ後鄭ふ帝ハ行方ゆ知ずる去程に
勇信吉帝女夫ゆ上絶ふ八幡に小賊乃分抱ふ手滅ゆ者ふ
金扶做りふで敵の前段を裂人又毎ふ手面退蔦ふ自来也の敵乃
如し小賊ふ賊ふ遣し逆子城後ふ国ふ凱先異尾ふ名城長ふ信ふ
遭て仇討乃ふ中退活バ也ふ中夫婦ふ手ふ輝星乃縮ふ
大ふ独説信吉義鳥ふ長ふ信義城主椎津國久の縣金庫へ消へ
出ふ者バ老早ふ房ふ鎖ゆ浦復讐の動静諸国へ皮ふ出ふバ椎津家
ゆ事て事乃び却て信吉帝迎の人数ふ出ふ者ふ高義ふ
こゝゆ為バ縣吏ふ倖ひと書一通婚書ふ仇せバ信吉義鳥迷ふに

倭吉
傳兵衛



南姫事と差し四西天竺の間自未世説話巻五下

盛徳の首領あり半巨義と童んびるとのふ行へば迎ひ面〜奉らん
事ハ葉茅うけがいひと祥ふ動静速ぶべ縣吏此有中立るまで国久
満怪行り天晴孝子ありて侶吉帝と話見行り乃め〜考れて対面
おし種この場行り〜を后改百生れ父源を帝孫深ふ百年石
加恩行り三百石場〜く勇ふ時目相續申けくれるべ欲ふ
勇侶吉帝義もと姫婚とう孫び系富業ふ暮〜ぬと昔語と
今世孝子ふ後世孝子ふ亀徳ふ〜めと拉事ふ寫記行りぬ

自未世説話巻ノ五下 大尾

後叙

詩ハ声あれ絵ハ画画ハ象あれ詩ハ語ハ
文ハ世乃ル童ハ行ハ詩の赤ハ〜り
ハるもハ中ハ〜ハ画ハ行ハ古ハ
実ハに茅里の書と結ハ机ハ千載ハ
古ハとハ茅ハ弟ハ中ハ〜ハ聴り
ハ〜ハ世文ハ見ハ〜ハ

山と歌人詠せし自然也いかにあひ
後態乃功成就し今初て驚歎せ
上侯他人北東狀を拝見し侯事を
歌〻理れとふ成あきらかにしもの
賞仕度哉此世の世人を見て
仙を学〻舟成侯ものを蔵を性み
中〻ゝんすこ感和尊主義祈の〻〻

あるとは是〻を元にしてその後ふ言を
せ〻中やさ書と事ふやゝそ以ふ之の主義
主張述侯つ〻ゝ文章事何り申尽
ゝ侯ゝ〻と事れ〻ゝ〻ゝ〻ゝ〻ゝ
唯あゝさ面千いふ乃ゝ

千歳居翁亀

這うり自素也生涯乃行狀奇俠併西天尊のうけ
百里地獄廣く欧と出逢うのわっ不殘後篇うり
出版しに依一覽ヤハい

感和亭鬼武著

蹄齋北馬畫

文化三丙寅歲
孟春